

INDEX

リレー随想 日々感懐（厚生労働省東北厚生局長 藤井 充氏）(p1) / 留学体験記2編：宇津木恵氏 (p2)、都竹茂樹氏 (p4) / 研究等助成受領成果報告3編 (p6) / 「温故知新」 - 助成研究者は今 - (福原俊一氏) (p9) / 第4回ヘルスリサーチワークショップのテーマは“新しい医療のデザイン - 崩壊から再生へ - ”に決定 (p10) / 第4回HRW趣意書と幹事世話人からのコメント (p11) / 第3回HRWに参加して(尾上佳代子氏、野村馨氏、山本大助氏、藤本晴枝氏) (p14) / 理事会・評議会報告、決算報告 (p16) / 第14回ヘルスリサーチフォーラムプログラム内容決定 (p18) / 第14回ヘルスリサーチフォーラム開催のお知らせ (p20) / ご寄付のお願い (p20) / 編集後記 (p20)

Vol. 50

2007年10月

HEALTH RESEARCH NEWS



ヘルスリサーチニュース

主な 内容	留学体験記	平成 15、16 年度に行われた海外留学助成の成果をレポートして頂いています。今回はスウェーデン（カロリンスカ研究所）、米国（ハーバード公衆衛生大学院）への留学報告です。
	「温故知新」 - 助成研究者は今 -	第 5 回国際共同研究助成採択者の福原俊一氏にご寄稿頂きました。ご研究のその後と近況をご報告頂き、併せて、当財団への思いを綴って頂きました。
	第 3 回 HRW に参加して	本年 1 月の第 3 回ヘルスリサーチワークショップの参加者から、ご感想を寄稿して頂いています。今回はその第 2 弾です。
	第 14 回ヘルスリサーチ フォーラムプログラム	11 月に開催するヘルスリサーチフォーラムのプログラムが決定しました。大会場の発表会に加えて、昨年好評を博した、小会場ででの討論に重点をおいたランチョンセッションが、今回も併催されます。

第 15 回リレー随想 日々感懐

安全と安心

最近、保健医療や食の分野では「安全・安心で質の高い医療の確保」、「安心・安全な職場づくり」など「安全」と「安心」をセットで使うことが多い。広辞苑によると、安全とは物事が損傷したり、危害を受けたりする恐れのないことであり、安心とは心配・不安がなく心が安らぐこととされている。別の言葉で言い換えると、安全とは客観的な事実をもとにしたものであり、安心とは主観的な心の持ちよう、気持ちの問題であるといえる。

厚生労働行政分野においては以前より一層、施策を企画立案するのにしっかりした根拠を求められるようになってきた。しかし科学的、客観的な事実をもとに立案した安全性に係る施策が、住民から安心につながるものになっていないと不満があがることもある。そのため、行政の政策決定過程に住民、当事者に関与してもらうことも多くなってきている。また、安全と安心のギャップを埋める手法としてリスクコミュニケーションが行政分野においても注目されている。

政策は立案することが目的ではなく、それを実施して健康の確保などの目的を達成することに意味がある。今後は、単に政策決定に必要な科学的知見、データの整理をするだけでなく、社会経済的側面も考慮して、政策を実施した場合の住民のコンプライアンス、満足度、如何にすれば効率的・効果的に施策が実施できるかなど政策のPDCAサイクルを総合的に検証する新しい政策科学研究が必要になってきている。



藤井 充

厚生労働省
東北厚生局長
前厚生労働省大臣官房
厚生科学課長
(原稿執筆時は当財団選考委員)

次回は東京大学大学院医学研究科 内科学教授 永井 良三 先生にお願い致します。

多くの人々に支えられて



独立行政法人 国立健康・栄養研究所 研究員 **宇津木 恵**

はじめに

暗く長い冬の終わりを待っていたかのように、春の訪れと共に一気に草木が芽吹き、やがて数時間しか太陽が沈まない夏を迎える国 スウェーデン。この度、私は、ファイザーヘルスリサーチ振興財団の助成を受け、日本では学問としての地位がまだ十分に確立されていない公衆栄養学を学ぶため、スウェーデンカロリンスカ研究所に留学を致しました。

カロリンスカ研究所

スウェーデン カロリンスカ研究所は、1940年創設の医学系の単科教育研究機関としては世界最大であり、ノーベル賞の生理学・医学部門の選考委員会があることで有名なヨーロッパ屈指の研究教育機関です。カロリンスカ研究所は、ストックホルムの北部ソルナと南部フディングの2ヶ所にあり、大学病院のベッド数は1,800床、看護師、医師、研究者を含め約15,000人が勤務しています。同研究所は同時に、専門家を育成するための教育システムも備えており、今回私が留学した公衆栄養学課程は予防栄養学分野内にありました。

本課程は、欧州連合加盟国が共同で行っているヨーロッパ委員会公認の事業であり、「栄養・運動を介し効果的な健康増進活動を遂行するために、十分な技能と知識をもった公衆栄養専門家の養成」をすることを目的に、国の垣根を越えた幅広い教育、研究活動を行っています。



スウェーデン民族舞踊 - 夏至祭にて -

仲間との出会い

平成17年9月、研究室に集った学生は、バックグラウンドとなる医療資格、出身国、文化や考え方も全く異なる約15名であり、皆一様にそれぞれのいた現場で感じた疑問や問題意識を持って課程に臨んでおりました。

課程修了のために通過しなければならない科目は年12科目あり、毎科目、グループワーク、プレゼンテーション、十数ページに及ぶレポート(もしくは試験)がありました。特にグループワークに関しては、互いのもつバックグラウンドの違いから来る意見の相違に、言い合いになる時もあり初めはどうかと思われましたが、朝から晩までの授業と、その後の図書館ブースを借り切った議論や発表に向けての準備を通じ、科目が終わる頃には相互理解と強固な団結が生まれていました。

一方、研究では、欧州数カ国が共同で行っている大規模コホート研究 ~ European Youth Heart Study ~ に関わり、近年子供におけるリスクの増加が懸念されているメタボリックシンドロームと栄養・食事摂取の関連について検討を行いました。



博物館で日本舞踊披露の際、来てくれた研究室の仲間達と

留学体験記

平成16年度若手海外留学採択者

今回の留学で得たこと

第一「出会い」

今回の留学で得られたこととして、まず一番にあげられることは何といても「他の研究者との出会い」です。このことについては、多くの留学経験者も同様に感じていることと思いますが、日本にいたならまず接する機会はないであろう他分野、他職種の研究者と知り合い、語り合うことができたことは、大きな収穫でした。特に留学してすぐは、生活の多くのことに“研究者”という共通点だけで朝から晩に至るまで沢山の先生方に助けていただき、人の優しさ、温かさに触れることができました。同じ時間、場所を共有していた仲間だからこそ得られた友好関係を、今後も大事にしていきたいと思っています。

第二「国際的視点」

疾患予防・健康増進のためには、適切な評価を行い早期予防に努めると共に、実際の現場で日常生活レベル、すなわち日々の食事や運動を介した健康増進と環境整備を行うことが肝要です。今回の留学は、地域に密着した公衆栄養学を学ぶのが第一の目的でしたが、地域での健康増進活動が進んでいるヨーロッパで生活を送ることで、今後地域で疾患予防・健康増進活動を実践する際の示唆を得ることも一つの目的でした。一年間の海外生活を経て、栄養や運動に対する取り組みや実践、それに対する住民の反応を見聞きし肌で感じると共に、同じ研究室にいる世界から集まった友人達との語らいを通じ、様々な考え方、多くの視点を得ることができました。しかし、同時に痛感したのは、例えば魚類一つといても、それぞれの土地により収穫できる魚の種類や食文化の異なりから「青魚」「白身魚」といった分類が存在しない国があり、そのような国にとっては魚から得られる栄養素そのものを摂取するための方策が重要であったりします。また運動の重要性は意識として共通であっても、その内容や実現可能性は気候や環境により大きく異なります。他国の実践を取りあげて比較し、ただ模倣するのではなく、それぞれが自国の文化・社会的背景を踏まえて、展開できそうな良い点はうまく取り入れ、国



Dr. Agneta (予防栄養学分野 最高責任者)と

民の健康レベルを上げていくことが重要なのだと感じました。

前述したように疫学や公衆衛生学を土台として研究、実践を行う公衆栄養学は日本ではまだ学問としての地位を十分に確立しておらず、まして栄養疫学の視点からの確に栄養摂取データを扱い世界に通用する研究を行える専門家となると、非常に少ない状況にあります。今回の留学の日々を通じ公衆栄養学研究の方向性や具体的な取り組みを肌で感じることは、今後研究を進めていく上で何よりの自信となりました。また、国という垣根を超えて多くの専門家と関わったことで、帰国後も欧州連合で催される様々な会議のお誘いや、研究の遂行に際しより詳しい専門家を紹介していただいたりと、出会いの場と機会が広がりました。今後は、今回の貴重な経験と日本における現状を踏まえ、幅広い視点の下、栄養疫学・公衆栄養学研究のより一層の研鑽と実践を図っていきたくと考えます。

最後になりましたが、今回の留学に際し、多くの方々の心強い支えに感謝すると共に、貴重な機会を頂きましたファイザーヘルスリサーチ振興財団に心より御礼申し上げます。本当に有難うございました。

宇津木 恵

受入機関	カロリンスカ研究所(スウェーデン)
取得学位	Master of Applied Public Health Nutrition
留学期間	2005年9月～2006年8月

ハーバード留学記

日本の経験を世界に 世界の刺激を日本に



日本ボディデザイン医科学研究所 所長 **つく 都竹 茂樹**

「人生観が変わるよ」

これは留学することをおあるハーバードOBの先生に、ご報告した際に頂戴した言葉である。そのときは授業について行けるかどうかの不安が大きく、「人生観が変わる」と言われてもピンと来なかったというのが正直なところであった。

留学の動機

40歳の誕生日をハーバード公衆衛生大学院(以下、HSPH)で、しかも大学院生(Master of Public Health, Family and community health専攻)として迎えることにした一番の理由は、それまで携わってきた、食と運動による肥満や生活習慣病の予防・改善、すなわちヘルスプロモーションやディジーズマネジメントを日本で本格的に発展・普及させるべく、その理論と手法を学ぶことであった。ただアメリカは成人の2/3が肥満か過体重という超肥満大国であり、果たしてこのような国からいったい何を学べるのか?という不安があったのも事実である。文字通り、不安だらけの船出ではあったが、とにもかくにも、2005年7月から1年間の大学院生活が始まった。

Japan Trip

HSPHの概要・専攻コースなどについては、2007年4月号(No.49)で高橋理先生が紹介されているので、詳しくはそちらを参照いただきたい。

私がHSPH在学中で一番印象に残っている出来事といえば、Japan Tripである。これは世界各国から

Japan Trip



集まってきたPublic Healthのリーダー候補生であるHSPH同級生たち(約40名)を日本に連れて行き、日本の公衆衛生を紹介する、そして日本の関係者には各国のPublic Healthの現状を紹介するという2つの目的を兼ね、私たち学生が企画・運営したものである。

事の発端は、世界の保険制度やヘルスプロモーションなどを紹介する授業において、日本の事例がほとんど取り上げられないことであった。その一因として挙げられたのが、英語による信頼できる日本発の情報ソースが限られているという点であった。

ならば日本の公衆衛生を世界に知ってもらおう!ということで秋学期が始まって間もない9月下旬から、『日本の経験を世界に、世界の刺激を日本に』を合い言葉に、Japan Tripのプロジェクトが始まった。主なスタッフは、医師、政府官僚、企業出身者など、年齢もバックグラウンドも異なる日本人在校生、および日本に興味を持っているアメリカ人学生であったが、日本にみえるHSPH卒業生の先生方からも本当に多くの励ましとご支援をいただいた。

授業の合間を縫って、それもわずが3ヶ月間の準備期間。しかも参加費が30万もかかることから、果たしてどれほどの参加希望者があるか、正直心配であったが、12月に実施した説明会のあと、40名以上の学生が参加を表明してくれた。これは驚きでもあり、日本のことに興味を持ってくれる学生がこれほどいるという事実は大きな喜びでもあった。その後、3月の出発までに、日本に関する論文をコースパケットとして配り、事前勉強会も数度開催して、いよいよ3月の1週間の休みを利用して一行が日本を訪れた。

給食

Japan Tripでは厚生労働省、病院、老健施設、日本医師会などPublic Healthに関連する施設を精力的に訪問してDiscussionしてきたが、ヘルスプロモーションを専門にしている私にとって、是非、彼らに紹介したいものが一つあった。それは日本の給食である。

なぜ給食なのか?それは渡米間もない頃に聞いた、日本人同級生の息子さんが通う幼稚園のスクールランチが「ピザとダイエットコーラ」という非常にショッ

留学体験記

平成16年度若手海外留学採択者

キングな話、それに小学校に炭酸飲料が買える自動販売機が設置されている(さすがに、最近は規制されたようだが)現状を知ったからであった。果たしてこういう事は極端な例かと思い、色々と聞いて回ったところ、アメリカでは特に珍しいことではないようである。三つ子の魂百までと言われるように、子どものときの食習慣は成人後にも大きな影響を及ぼす。裏を返せば、子どもの時にひどい食習慣を身につけると、大人になってそれを変えるのは非常にむずかしい。それを解決する一つのヒントとして、彼らに学校給食を体験してもらいたかった。

「子どもを日本の小学校に入れたい」「学校であのような美味しいものを食べられるのは信じられない」「私が子どものときに食べていたスクールランチはいいわい・・・」といった給食に対する彼らの賞賛は尽きなかった。さらに個人主義が浸透しているアメリカ人たちにとっては、小学生の子どもたちがみんな協力しあって給食の準備をし、一斉に食べ、食べ終わるとまた協力し合って片付けるといふ、彼ら曰く「軍隊のような振る舞い」は、驚嘆に値したようだった。

しかし、そんな日本もコンビニエンスストアの普及、またファストフード、ジャンクフードが24時間、どこでも買えるようになり、今や子ども・成人を問わず肥満が増加し、それに伴ってメタボリックシンドロームや生活習慣病が加速度的に増加している。こんな時代だからこそ、日本の子ども達に今一度、いつまでも健康でいるための適切な食事の「選び方」といった術を伝えていくことも、私のようなヘルスプロモーションに携わる人間の重要な役目だと、アメリカ人学生の反応をみていると強く感じた次第である。

Japan Tripその後

1週間のJapan Tripを終え、ボストンに戻ったあと、参加者による帰国報告会が学内で何度も開かれ、日本での経験を彼ら自身の言葉で在校生に紹介してくれた(紹介と言うより「宣伝」という言葉の方が適切かもしれない)。その影響もあって、私たちが卒業した今年度も第2回のJapan Tripが開催され、すでに第3回のJapan Tripも企画されるなど、「日本の経験を世界に」という当初の願いは少しずつ浸透しているようである。

一方、「世界の刺激を日本に」については、これから



ジョンハーバードの像

少しずつでも伝え・広めていくのが、HSPHにおいて世界からの刺激にどっぷり浸かることのできた私たち卒業生の使命だと強く感じている。

最後にいささか宣伝めいて恐縮ではあるが、在学中に、HSPHでの経験も織り交ぜた「あと5センチひっこめろ!」というメタボリックシンドローム対策の啓発本をディスカバー社から上梓し、また筋力トレーニングが糖代謝、身体組成におよぼす影響に関する学術論文を英文雑誌に掲載することができた。

1年間という短期間に、授業から学ぶだけでなく、様々な人たちと交流し、このような成果が得られたのも、HSPHへの留学を勧めてください、多大なサポートを賜った、Pacific Health Research Institute(ホノルルハートプログラム)の矢野勝彦先生と、財政的な支援を賜ったファイザーヘルスリサーチ振興財団のおかげであると深く感謝し、この場をかりて、お礼を申し上げます。ありがとうございました。

留学記を終えるにあたり、今「HSPHへ行って人生観が変わったか?」と問われたら、躊躇なく「確実に人生観は変わった」と答えることを申し添えます。

Japan Tripの詳細は、<http://hsph.jp/JT2006/index.htm>

都 竹 茂 樹

受入機関	ハーバード公衆衛生大学院(米)
取得学位	Master of Public Health
留学期間	2005年7月～2006年6月

平成17年度
国際共同研究

効果的かつ効率的な禁煙治療の 普及方策に関する国際比較研究

研究期間：2005年11月1日～2006年10月31日

代表研究者：大阪府立健康科学センター健康生活推進部 部長

中村 正和

共同研究者：Department of Community Medicine, the University of Hong Kong
Chair Professor and Head

Tai Hing Lam

Department of Nursing Studies, the University of Hong Kong, Head

Sophia Chan

Department of International Health, Boston University School of
Public Health, Associate Professor

A.S.M. Abdullah

【目的】

喫煙習慣の本質はニコチン依存症であり、禁煙治療が医療サービスとして定着するように環境を整備することは重要である。本研究では、既に禁煙治療が制度化されているイギリス（イングランドに限定）とアジアの香港、台湾、韓国、日本を対象に比較研究を行い、禁煙治療の効果的かつ効率的な普及方策について検討した。

【方法】

5カ国の禁煙治療の制度化の実態について、文献調査や調査票による調査、現地関係者からの情報収集を行った。また、イギリスと香港については現地調査を行った。

【結果】

禁煙治療サービスは、日本が禁煙治療を保険適用しているのに対し、他の国々では公的な保健サービスとして提供していた。禁煙治療費用は、日本と台湾は自己負担があるのに対し、イギリス、香港、韓国では全額が補助されていた。治療内容は、いずれの国においてもカウンセリングと薬物療法の組み合わせであった。禁煙治療をモニタリングするシステムは各国で構築されており、イギリスではサービスの年間利用者数は約60万人（喫煙人口の6.3%）、香港では約6千人（同0.8%）、台湾では約20万人（同4.9%）、韓国では推定約10万人（同0.9%）であった。6ヵ月後の禁煙率を用いて成績を比較すると、香港のHAでは25%、DOH40%、台湾20%、韓国約20%であった。イギリスでは4週間後の禁煙率が55%であった。無料の電話相談サービスは日本以外では各国で提供されていた。指導者トレーニングは、台湾、香港、イギリスでは公的に提供する体制が整備されているが、韓国、日本ではまだ未整備であった。

【結論】

本研究の結果、5カ国の禁煙治療サービスの特徴や課題が明らかになった。わが国の特徴は、世界に先駆けて公的な医療保険制度に禁煙治療を導入したことである。しかし、この制度は緒についたばかりであり、しかも効果検証のための特別調査の対象とされており、一定の成果をあげることが求められている。今後、禁煙治療の実施機関を増やすとともに、わが国で広く実施されている健診の場での禁煙支援・治療の制度化、指導者教育の充実、無料の電話相談サービスなどの整備を図り、治療の普及度や効果の向上を図る必要がある。

成果発表：

雑誌掲載

雑誌名	公衆衛生
論文標題	諸外国における禁煙治療サービスの実際：イギリスと香港の場合
著者名	守田 貴子、中村 正和、大島 明
発行年月	2007年1月

その他、雑誌掲載、学会発表等

平成17年度
国際共同研究

高齢者虐待予防と早期発見を推進する 地域ケアシステムに関する国際的研究

研究期間：2005年11月15日～2006年10月31日

代表研究者：東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科
地域保健看護学 教授

佐々木明子

共同研究者：広島大学大学院保健学研究科 教授

小野 ミツ

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 教授

高崎 絹子

カルマル大学 教授

Britt-Inger Saveman

前スウェーデン王国社会庁 専門調査官、ヘルスコンサルタント

Harriet Persson

宮城大学看護学部 講師

桂 晶子

介護老人保健施設あこがれ 理事長

大島 扶美

日本とスウェーデンの比較から、高齢者虐待事例の早期発見と予防に関する地域看護職者の対応の現状とその役割を明らかにすることによって、高齢者虐待の予防と早期発見を推進する地域ケアシステムのあり方を検討することを目的に研究を行った。日本とスウェーデンの高齢者虐待の予防と早期発見と対応に対する地域看護職者のグループインタビュー調査、地域ケアシステムの現地調査、地域看護職者対象の高齢者虐待事例の質問紙調査の3つの調査を行った。結果及び考察は以下のとおりであった。

1. 高齢者虐待の発見には、専門家同士で協力し徴候を早めにキャッチする、家族、住民、保健医療関係職者が連携し、対応すること、相談窓口の設置とその機能の充実が重要であった。
2. 高齢者虐待の報告が重要であった。記録の方法などが十分にルーチン化されていない現状から、文書化、報告義務、家族や他の専門家と連絡の重要性が強調された。
3. 高齢者虐待の予防には、家族と話し合い、良好な関係を築き上げ、変化をもたらすこと、家族介護者を休息サービスの利用や頻繁な家庭訪問で支援し、高齢者虐待関連の課題の教育と情報を提供することが重要であることが明らかとなった。また、住民、ボランティア、保健医療福祉関係職者との連携の強化、虐待予防の啓蒙活動の推進、虐待を起こさない地域づくりが提言された。
4. 職場での高齢者虐待の定義、対応のガイドラインの整備が十分でないため、地域看護職者に高齢者虐待の対応指針が伝わらないことが多く、早急にシステム化する必要があった。
5. 虐待の対応時の困難として虐待の事実確認の困難、介入の困難、経済問題への対応の困難、医療機関との連携の困難があげられ、研修、事例検討会などを通しての看護職者の力量の向上と他の専門職者との連携を促進する必要性が示唆された。

成果発表：

雑誌掲載

雑誌名	日本地域看護学会第10回学術集会講演集
論文標題	地域における高齢者虐待予防、早期発見と対応に関する研究 (第1報) (第2報)
著者名	佐々木明子、小野ミツ 他
発行年月	2007年7月

その他、雑誌掲載、学会発表等

平成 17 年度
国際共同研究

医療教育シミュレータ評価・開発・普及研究

研究期間：2005年11月1日～2007年1月31日

代表研究者：京都大学大学院医学研究科医療経済学分野 教授

今中 雄一

共同研究者：医療法人社団カレスアライアンス 理事長

西村 昭男

名古屋大学大学院工学研究科生体医用マイクロ工学 教授

生田 幸士

航空産業等のハイリスク分野で高度なシミュレータが職業トレーニングに利用されており、医療分野でもその効果が期待されるもののわが国では十分に普及していない。本研究の目的は、国内外における医学教育シミュレータの開発・活用・評価の実態を調査し、今後の発展・普及の関連要因を検討することである。

医療におけるシミュレータ利用の最大目的は、診断・治療・意思決定に関する実践的な知識・技術の習得であり、事故防止・安全確保にも通じる。これらの効果を科学的に実証することは極めて難しく、系統的な文献レビューの結果、医療事故減少や患者アウトカム改善の効果を証明した実証研究はみあたらなかった。効果評価法の確立は課題として残るが、直感や経験の上で感じられる妥当性と他産業における成功もあり、医療のシミュレーション・トレーニングはこれからも発展するであろう。現に、米国などでは医学部教育、研修医の臨床研修教育に加え、専門医の認定・更新制度にも活用されるようになっている。

医療の訓練用のシミュレータには、切開縫合・腰椎穿刺・気管内挿管・乳房診などをトレーニングするための人体レプリカ、個々のケースに応じた医学判断を問いながら進む形式、リアルな生体反応を再現できる患者・臨床環境の高度なシミュレータ等様々なものがある。特に後者は高額となるが、経験前や症例数の少ない場合の技能向上に強力な手段となり得る。

医療技術訓練や技術支援のシミュレータやロボットは今後重要性を増し成長市場となろう。だが、これらの基盤となる技術やアイデアの多くがわが国で創生されているにもかかわらず、製品化、市場化の点で、欧米に大きく立ち遅れている。当該産業育成の国策としての優先度や技術の芽を市場化に繋げる仕組み・社会基盤に課題があるのではないか。

今日、医学教育シミュレータは、専門技術教育のみならず、医療の安全性を高める観点からも重要である。しかし、その医療現場への導入は、収入とも対応しない上に、海外製品だけにコストがより高くなる。医学教育シミュレータの普及・活用、さらには当該領域の国内産業の育成は、医療界に大きな便益を生むと考えられるが、そのためには、国レベルでの研究開発と市場化との融合を含む産業振興施策が重要な役割を果たすであろう。

共同研究者	岡住 慎一	千葉大学大学院 医学研究院 食道・胃腸外科 准教授
	松岡 順治	岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 消化器・腫瘍外科
	佐藤 徹	慶應義塾大学医学部 呼吸循環器内科
	州之内廣紀	河北総合病院 病院長
	井伊 雅子	一橋大学大学院国際・公共政策大学院 教授
	Leo Villegas	Beth Israel Deaconess Medical Center (Boston) Department of Surgery
研究協力者	橋爪 誠	九州大学 医学研究院先端医療医学部門 災害救急医学分野 教授
	伊関 洋	東京女子医科大学 先端生命医科学研究所 先端工学外科学分野 教授
	鈴木 直樹	東京慈恵会医科大学総合医科学研究センター高次元医用画像工学研究所
	大場 章男	ソニー・コンピュータエンタテインメント コンピュータ開発本部アーキテクチャ研究部
	河北 博文	河北総合病院 理事長
	関本 美穂	京都大学大学院医学研究科医療経済学分野 特任講師
協力施設	Riverside Methodist Hospital/ Center for Medical Education + Innovation	
	University of Pittsburgh Medical Center/ Peter M. Winter Institute for Simulation, Education and Research	
	University of British Columbia Vancouver / Center of Excellence for Surgical Education and Innovation	

温故知新 - 第3回 -

財 団 助 成 研 究

... その 後

第5回国際共同研究助成採択者

京都大学医学研究科 社会健康医学系専攻
医療疫学分野 教授

福原 俊一



1996年にファイザーヘルスリサーチ振興財団から第5回国際共同研究で助成をいただいた。この研究は、UCLA総合内科教授のNeil Wenger先生および尾藤誠司先生（現国立病院機構 臨床研究推進室長）と共同で、終末期医療における医師・患者・家族の意思決定に関して行ったが、これは後に貴財団から渡航助成をいただいて同じ部署に留学した松村真司先生（現松村医院院長）によって引き継がれ論文として結実した。（Matsumura S, Bito S, Liu H, Kahn K, Fukuhara S, Kagawa-Singer M, Wenger N: *Journal of General Internal Medicine*, 2002）実はさらに遡ること17年前、筆者がHarvard Medical SchoolのClinical Effectivenessという臨床研究の集中コースで修練を受けに行った際に提出した最初のリサーチクエストもこのテーマであった。その後、このクエストは浅井篤先生（現熊本大学教授）によって国際共同研究に発展し、論文化した経緯がある。（Asai A, Fukuhara S, Lo B. *The Lancet* 1995）この一連の研究テーマは、現在もこの3名の先生により、政府からの研究助成のもと深められ発展していると、嬉しくうかがっている。貴財団がこれら一連の研究に与えてくださった貴重な機会に対して、感謝するとともに、この研究から得られた知見が、論文等の可視化された媒体を通じて多くの方々へ共有され、ひいては診療実践の改善にも貢献することをもって報いたいと考えている。

思えば1990年代初頭、ファイザーヘルスリサーチ振興財団発足当時、我が国にはヘルスリサーチという概念がまだ定着していなかった。EBMという用語はなく、臨床研究も他の意味で理解されていた。そのような時代にヘルスリサーチを推進する組織を発足させた財団の見識に改めて敬服する。その後、1990年代末に、EBMが澎湃（ほうはい）として現れ、我国に良質なエビデンスが不足していることが認識されるにいたり、エビデンスを提供する臨床研究、これを包含するヘルスリサーチの重要性の認識は飛躍的に増大したといえよう。現在厚生労働省の戦略的アウトカム研究など大型の臨床研究への助成も行われるようになった。

このように政府機関が大型のヘルスリサーチに助成を行うようになった現在、貴財団の社会的役割も変化しても良いのかもしれない。一例にすぎないが筆者の体験を少し。25年ほど前に筆者はUCSFで内科研修を受けたが、最終年度にelectiveとして、疫学教授のSteven Hulley教授が主催した研究デザインコースに参加した。この時コピーして配付されたシラバスが後に名著「Designing Clinical Research」(William & Wilkinson)となり、日本でも多くの人に読まれている。当時Hulley教授はカーネギーメロン財団からファンドを得ていて、6～7名の若い臨床医がfellowとして給与を得て勉強していた。このfellow達の殆どは現在アカデミックセンターの教授として臨床研究と人材育成に貢献している。たった2か月であったがここで受けたexposureは確実に私の人生も変えた。7年後再渡米し先述した臨床研究の修練を受けること、そして15年後に京大に臨床研究者養成者コース（www.mcrkyoto-u.jp）を開講することに繋がったのである。

貴財団にはぜひこの例にあるカーネギーメロン財団のように、「若手人材の人生を変える」きっかけを作るような事業にも今後大きく貢献していただき、さらなる発展を遂げられることを切に願うものである。

第4回ヘルスリサーチワークショップのテーマは

“新しい医療のデザイン - 崩壊から再生へ - ” に決定

3月30日(金)及び8月29日(水)に、それぞれ第13回、第14回のヘルスリサーチワークショップ(以下HRWという)幹事世話人会が開催され、第4回HRWのテーマ、基調講演内容、参加者等が打ち合わされて、以下の内容が決定しました。

第4回ヘルスリサーチワークショップ

テーマ：新しい医療のデザイン - 崩壊から再生へ -

開催日：平成20年1月26日(土)・27日(日)(1泊2日)

開催場所：アポロラーニングセンター(ファイザー(株)研修施設：東京都大田区)

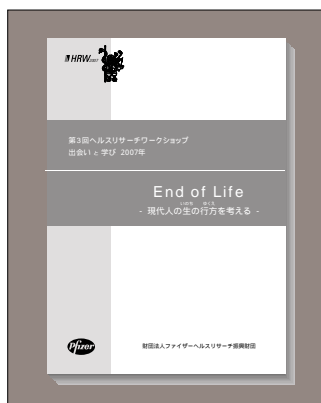
参加者：招待、推薦、公募により約40名

今回も、ワークショップの基本的なスタンスは引き続き「出会い」と「学び」であり、多彩な人材が参加して、出会い、そして楽しく学ぶことが最大の目的とされています。

基調講演演者、具体的なプログラム内容は、11月に開催する第15回幹事世話人会で決定する予定です。
(尚、第4回ワークショップの趣意書と各幹事・世話人からのメッセージはP11～P13に掲載しています。)



第3回HRW 記録冊子が完成しました



第3回HRWの内容を記録した冊子が完成しました。多岐に亘る討論の足跡は、必ずやヘルスリサーチ研究者に新しい視点をもたらすものと確信します。ご希望の方は別紙申込書にてお申し込み下さい。(無料、数量限定)

第4回ヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人 (敬称略・五十音順)

幹事

中島 和江 大阪大学医学部附属病院中央クオリティマネジメント部 病院教授
中村 洋 慶應義塾大学大学院ビジネス・スクール(経営管理研究科) 教授
長谷川 剛 自治医科大学医療安全対策部 教授

世話人

後藤 励 甲南大学経済学部 准教授
島内 憲夫 順天堂大学スポーツ健康科学部 教授
中村 伸一 国保名田庄診療所 所長
安川 文朗 同志社大学大学院総合政策科学研究科 医療政策・経営研究センターセンター長
湯本 明 ファイザー(株) 経営企画部門 統括部長
吉川菜穂子 聖路加看護大学 看護実践開発研究センター 助教(シニア)

アドバイザー

開原 成允 国際医療福祉大学大学院長

サポーター

今井 博久 国立保健医療科学院疫学部 部長
川越 博美 元聖路加看護大学看護実践開発研究センター教授
菅原 琢磨 国立保健医療科学院経営科学部 サービス評価室長
中村 安秀 大阪大学大学院人間科学研究科 教授
平井 愛山 千葉県立東金病院院長
福原 俊一 京都大学大学院医学研究科医療疫学分野 教授

第4回ヘルスリサーチワークショップ 新しい医療のデザイン

崩壊から再生へ

趣意書

平成19年度でヘルスリサーチワークショップは第4回目を迎える。過去3回のテーマは「赤ひげを評価する」「2030年への羅針盤」「End of Life」とした。企画段階では強く意識したものではなかったが、結果的にそれぞれに時宜を得たものとなった。「赤ひげを評価する」では、いわゆるジェネラリストとしての医師の現代での有り様を越えて、ケアの継続性に対する強い希求が指摘された。「2030年への羅針盤」では、人類史上最も先端を走る本邦の人口減少社会について、人口減少に歯止めをかける社会としての工夫が議論された。「End of Life」では、死が隠蔽され収納された現代日本社会においては、実は豊かな生のあり方自体を考える機会が失われているという指摘があった。それぞれに大きな問題で結論が出せるような話ではなかった。だが、参加者が前向きに問題に立ち向かい、その中での多くの出会いと学びでこのワークショップは着実に成長してきた。

この間に医療を取り巻く環境は大きく変化した。今や医療関係者の話題として口にのぼるのは「福島県産科医逮捕事件」「奈良県妊婦死亡事件」「医師不足」「勤務医集団退職」など、医療の崩壊に関する内容ばかりである。医療従事者にとって現代の医療は行き場を失って苦しんでいるように見える。「この国の医療は一度完全に崩壊してし

幹事世話人からのメッセージ



幹事 中島 和江

現代日本の医療は崩壊の危機に瀕しています。今回はその原因を分析し、医療を再生させるための具体的なプランを考えます。本ワークショップでは、立場や専門の異なる人々が、それぞれのアイデアやテーマをぶつけて議論を尽くし、患者のみならず医療従事者や一般国民の全てが満足できるような新しい医療が提示されることを期待しています。



幹事 中村 洋

「崩壊から再生へ」というと、現代の日本の医療は崩壊していないという方も多いと思います。ただ私は、崩壊の芽は、小さいながらも、所々に存在しているように感じます。来たるワークショップでは、「崩壊しているかどうか」を議論するのではなく、本当に崩壊するかもしれないと言う「危機意識」を十分に持ち、新たな医療システムのデザインについて皆さんと様々な観点から議論できればと考えています。崩壊してからでは遅いのです。



幹事 長谷川 剛

自分が使いやすいように器械を作り替える。他の人が困らぬように案内板を立てる。通行しやすい様に道路のカーブを緩やかにする。これらの創意工夫、新しいなにもものかを生み出す工夫をデザインと呼ぼう。今回のヘルスリサーチワークショップは、新しい医療のデザインがテーマだ。私達は医療の何を守ろうとし、何を変えようとするのか？誰のために作り替えていくのか？
新たな出逢いの中で数々の議論ができることは望外の喜びである。

まえばいいんだ。そこから新しいものが生まれるだろう」という過酷な労働環境で疲弊しきった医師の意見も耳にする。わが国において、今ほど、医療におけるブレークスルー（突破口）とパラダイムシフト（価値観の転換）が必要とされる時代はないように見える。

その一方で、現代の医療は本当に崩壊しかけているのか？ という問いかけも可能だろう。我々はともすれば、メディアの報道だけから物事を判断しがちである。果たして、患者や国民には医療崩壊という認識や経験はあるのだろうか。医療従事者はどのような困難を経験しているのか。立場が異なり見る角度が異なれば、問題点も違ってくるだろう。各自の肌感覚を大切に、現代医療の抱える問題点を再確認する必要がある。

現代の医療は国民や患者のニーズに応えているのだろうか？ 誰にでも病気や怪我の経験があるだろう。そのような時に、心から満足した医療を受けることができたのか。また、なぜ健康食品、民間療法、健康番組が流行するのか、というのも同じテーマの裏表をなす問題であろう。生死に関わることだけではなく身近な経験を通じて、現代日本の医療の内容、医療にかかる費用、普段の生活における安心感なども考えてみたい。

現代が大きな転換点であることは間違いない。これまで提供されてきた医療を従来型医療と呼べば、これはそれなりに機能してきた。しかしここにきて従来型医療が破綻し限界を露出した原因は何だろうか？ 「弱者切り捨ての歴代政権のせいだ」「医者叩きに血道をあげてきたメディアのせいだ」という医療側の声がある一方、患者側からは「医師は自分さえよければそれでいいのか？」「赤ひげ精神はどこにいったんだ」という反論もある。自分の立場だけを主張して他者を非難していても事は解決しない。立場が異なり見る角度が異なれば、問題点も違ってくる。医療者はもとより、政治家、行政、国民、メディア、司法、そして患者も「ひょっとして自分も大なり小なり『医療崩壊』に加担しているのではないだろうか」という視点から考え直してみるのはどうだろうか。従来とは違ったものが見えてくるかもしれない。

これからの医療に期待されることは何であろうか？ 世の中には健康人と病人しかいないのだろうか？ 平均寿命が80歳を越える現代日本において、何の病気も持たずに過ごしている人の方が少数派であろう。かつては無病息災といわれたが、今では一病息災や多病息災が現実である。病気にならないための予防医学と同時に、疾病とのつ

幹事世話人からのメッセージ



世話人 後藤 励

医療を取り巻く環境が激変し、医療が世間の注目を浴びている現在は、新しい医療をデザインする絶好のチャンスともいえます。これまで二回のワークショップに参加しまして、医療を見る目には多様な視点があることをそのたび毎に痛感してきました。肩肘張らない議論の中で、自分の専門領域の限界を知りつつも可能性を再認識する。そんなワークショップになるためのお手伝いができると思います。



世話人 島内 憲夫

世界一の長寿国を誇る日本ではあるが、健康格差は拡大する一方である。この日本の現実を克服するためには、人々の健康を保健医療の専門家が考案した生物・医学モデルのみならず、社会科学の専門家が考案した生物・心理・社会モデルによって捉え直した新しい保健医療のデザインが必要である。今回で4回目を迎えるこのワークショップは、まさに未来に向かって学際的な視点から議論するとともに、夢を語り合える仲間が集う場と言えるだろう。皆さん、保健医療の専門家の枠組みを越え、ソーシャル・キャピタル（社会資本）を活用した“健康社会デザイン”を描いてみませんか。



世話人 中村 伸一

医療行為の末に不幸な結果に終わった場合、なった病気よりも携わった医療者側を恨むような人が多くなりつつある。医療者側は防衛的な医療にならざるを得なくなり、その結果、過剰検査や萎縮治療に陥ってしまう。医療崩壊の根底に潜むのは、制度やシステムの問題だけではなく、患者側と医療者側の間にある相互不信という深い溝のような気がしてならない。マクロな視点とミクロな視点の両面で、医療再生に向けた議論を期待したい。

きあい方も考えなければ社会そのものが成り立たない。この延長線上には「生きるとは何か」という問題がついてまわる。人は本当に長生きしたいと思っているのか。各自がどのように生き、どのように病気や怪我と向き合い、どのように死を迎えるのか、という人間として避けることのできない問いとそれに対する考え方によって、社会の中での医療の役割も変わってくるものと考え。

そこで、今回の企画は現代医療の直面している課題に真っ向から取り組むものとした。「新しい医療のデザイン - 崩壊から再生へ」というテーマである。今まさに壊れつつあるかのように見える従来型医療に対し、医療者はもとより、患者も、国民も、行政も、政治家も、メディアも知らないふりは許されない。あらゆる立場の人間が集まり、建前抜きの本音の議論を行い、様々なアイデアを出し合い、より良い医療のための設計図を描きたい。



イメージキャラクター ヒポクラテスくん

今回のイメージキャラクターは、医聖・医学の父 ヒポクラテスです。設計用具を持って敢然と立つ彼ならば、現代の日本の医療にどんな再生の設計図を描くでしょう？

医療の再生のためには、「これからの医療に対する期待と役割」が示されることが必要であろう。これらはまだ多くの人々が認識しておらず、十分に言語化できていないものである。財源や制度からの十分な議論も必要であろう。それと同時に、まだまだ生かされてないリソースやネットワークにも目を向けてほしい。私達がまだ知らない素晴らしい試みもあるだろう。私達が想像もしなかったデザインが飛び出してくるかも知れない。世の中には素晴らしいアイデアが満ちている。今回のワークショップでの出会いと学びを通じて、参加者の英知を結集した医療再生のための設計図が描かれることに大いに期待する。

第4回ヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人一同

幹 事 世 話 人 か ら の メ ッ セ ー ジ



世話人 安川 文朗

かつてある社会学者は「医療そのものが健康に対する脅威になりつつある」と警告しました。医療の高度化、専門化は多くの果実をもたらしましたが、同時に本来その「生」が護られるべき人間を、医療の「制」を維持する働き手にしてしまいました。医療のための人間から、人間のための医療に立ち返ること、これこそが、新しい医療デザインのイメージであり、よりどころです。そのよりどころをぜひ皆さんと一緒に探したいと思います。



世話人 湯本 明

“医療の崩壊”、“皆保険の限界”といった言葉を耳にする。日本の医療制度は転換期である。しかし、多くの国民が適切な医療を受けられない不平等を容認する先進国になるのか？それとも、開かれた医療を持続可能なモデルで再構築できるのか？ また、“病気への取組み”を中心とした医療、“Sick Care”から、予防医療を介した健康増進モデル、“Healthcare”への転換をどう図るか？ この点から、今回“新しい医療のデザイン”を考えてみたい。



世話人 吉川菜穂子

私たちは必要な時に心から満足した医療を受けたいと願います。そのためには医療の質をさらに高め、医療の受け手1人1人の力をつける支援が大切であると考えます。日本の医療を救うためには、予防医学の強化も必要です。禁煙の問題やメタボリックシンドロームなど私たちの生活習慣や、生活の場といった視点から医療を創造し「健康」をつくることのできるのではないのでしょうか。これからの医療に期待されることを普段の生活における安心感なども考えつつ共に語り合しましょう。

「End of life」から「死の意志決定」「死ぬ場所」「いのちの教育」を考える

宮崎大学医学部看護学科 尾上 佳代子



今回の「End of life」というテーマに関して、個人的にも大に関心を持って参加しました。それは私的なことではありますが、昨年の夏、末期がんの義父の最期を看取るにあたり、いかに死にゆくか（生きるか）、在宅ケアの良さと限界、老々介護の実態など頭ではわかっていたつもりではありましたが、思っていた以上に理想と現実のギャップの大きさを痛感したからです。

初めてワークショップに参加して、「End of life」について、いろいろな立場から専門的な立場からの意見だけでなく、主観的というか本音に近いところでの意見までも出し合い、相互作用があったという満足感がありました。

「End of life」に関して新しい視野で「死の意志決定」「死ぬ場所」「いのちの教育」を考えることができました。中でも、生の最期を迎える場として、本人および家族にとって本当に在宅が最高の場所であるのか、それは国民みんなに可能なことでありうるのか。また、そのためのケアの体制（医療だけでなく看護や介護、福祉も含めて）や、医療・看護・介護・福祉に従事する専門職者の在宅ケアに関する教育は十分か、さらに超高齢社会を迎える中で地域介護力とも言える態勢はできているかなどについて、医療・看護に関する専門家の立場からだけでなく、広い視野から多くの意見を聴くと同時に自分の考えと対比することもできました。加えて、医療・看護の専門職はもちろんのこと、地域住民までも巻き込んでの「いのちの教育」を広げることの必要性も再確認できました。

今回のワークショップを通して得られた知見を、看護教育・研究の中で深めることに加え、さらに地域看護にかかわる専門職として住民の地域介護力を高める活動も積極的に展開していきたいと考えています。

このような出会いを与えてくださった、ファイザーヘルスリサーチ振興財団の皆さまに感謝申し上げます。

理想郷での異種交流の楽しみと効用

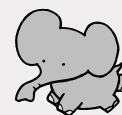
東京女子医科大学一次診療科診療部長 野村 馨



ヘルスリサーチワークショップ（HRW）の目的は将来の医療を担う他業種の人たちが一堂に会して熱く討論することと同じでした。結論を求めるのではなく、交流を目的とするとの贅沢な理念に賛成です。少人数（10人）のグループ構成（私はトキグループ）で議論がされました。後から気づいたことですが、参加者は、お互い利害関係のない中での「善意の人」としての議論でした。皆さんの志の高さを随所で感じました。日々の現場では皆さん種々の矛盾、葛藤を抱えて医療に携わっておられます。このHRWではそこから抜け出し、理想郷に身を横たえ、さらに高みにある理想を目指して議論するようなものです。HRWが終了してから帰りの車の中で、私は少しの疲労も感じていないことに気づきました。泊りがけの学会、ワークショップなどでは疲労を感じて帰路に着くのが普通です。HRWではむしろすがすがしい気持ちです。この感想はほかの方も共有しておられたようです。HRWは精神の浄化ももたらすのでしょう。

医療の現場では、成果が求められ、種々の葛藤が生じます。また患者、家族、種々の医療関係者が交錯する医療現場では摩擦が生じることもしばしばです。しかし、理想郷とはいえない医療の現場で対峙している相手にHRWで討論した相手が重なってみえます。そしてその先にあるものを信じていることができる気がします。鳥瞰的にものを見る余裕ができたためかもしれません。

HRWの目的にあるように参加者同士の連携で「新しいもの」が生じることもあるでしょう。しかし、それ以上にHRW参加はそれぞれの医療現場で新しい仲間づくりを試みようとする動機付け、あるいは焚き付けをもたらしました。この効果は大きいもののように感じます。最後に企画、運営の皆様ありがとうございました。三度のご飯、交流会でのご馳走なども美味でした。



第3回
End of
いのち
- 現代人の生の
に参加

流しそうめんの醍醐味？

大阪弁護士会 弁護士 山本大助

本ワークショップに参加させていただいたのは3回目になります。毎回、非常に楽しい2日間となっています。ヘルスリサーチに本業では関わりのない私にとっての「分科会に参加した意義」を述べさせていただきます。

分科会での討論は、テーマが絞り込まれていないため議論は拡散しがちです。私のイメージでは、半分に割った竹の筒を次から次へとそうめんの固まりが流れてくるように、意見が流れてきます。各々の専門分野からの意見が噛み合わず、議論に発展性がないように思えることもあります。けれども、他の参加者の発言の中に「はっ」とするものがあるのを見逃さないようにし、「はっ」とするものを見つけた時に、それについて、他の参加者の意見を求める、そういう態度で臨むと非常に得るものが多いと感じました。流れてくるそうめんの固まりが眼前を流れ去る前に、素早く箸ですくい取るイメージです。例えば、トキチームの討論の中で「『死』は最大の自己決定の場面である」という、おそらく法律家が所与の前提のごとく考えている命題に、文化人類学を専門とする参加者から疑問が出され、興味深く聴き入りました。

私は交通事故で後遺障害を残した被害者から依頼を受けることを専門にしており、ここ5年くらいは間口を絞り込み専門特化する方向にほぼ一直線に進んできました。私の弁護士としての最大の関心は、従来の水準を超える判決を多数とり、事故で重度の後遺障害を負った被害者の賠償水準を引き上げることにあります。

私は、一方で、間口を絞り込むことで専門性を高め、それなりの結果を出してきました。他方、従来の裁判例を乗り越えるために、これまでの枠にはまらない新たな立証方法を創造する必要に迫られています。「専門性の追求の中で凝り固まった思考を見直す」、分科会の討論は私にそんな機会を与えてくれたように思っています。



HRW
Life
ゆくえ
行方を考える -
して



「出会い」と「共鳴」

NPO法人地域医療を育てる会 理事長 藤本晴枝

今回、私は2度目のワークショップ参加となり、初回に感じたことをさらに深く感じました。時代は「つなぎ」を求めている、ということです。

私どものNPO法人は、千葉県の九十九里沿岸地域で「対話をする地域医療を育てる」をミッションに掲げて活動しています。対話のために必要な情報の共有を目指し、ホームページや情報紙を通して地域の医療課題を伝えたり、対話のためのイベントを開催したりしています。

現代は医療・福祉・行政がそれぞれに専門化・細分化してゆき、医者語・福祉語・行政語を話すようになりました。そしてその言葉で物事を考え、事業を行ないます。各語による思考や、問題処理の早さにズレが生じることもあり、互いが相手を理解したり、相手に自分の意図を伝えたりすることに困難をきたしています。今は、それらの言葉を通訳し、協働できる場を模索しつつ創りあげていく、そういう「つなぎ役」が求められています。

ヘルスリサーチワークショップは、そうしたつなぎの大切な場だと私は思います。今回は、分科会に分かれてEnd of Lifeという、それぞれが職業人としてある前に、人間として避けて通れないテーマについてディスカッションしました。職業語を語る人たちが、次第に自分の言葉を語っていく。そこにはそれぞれの立場からまた別の誰かにつながろうとしていく、それぞれの思いがありました。夜の交流会で、各々が日々取り組んでいることについてじっくり語り合い、耳を傾けることで、お互いが職業として取り組んでいることその中にこそ、その人そのものが息づいていることが感じられました。こうして、それぞれの立場にありながらも、参加者一人ひとりが生き生きとその生身の姿を現すのが、このワークショップの面白いところだと思います。

そのように振り返るとき、「つなぎ役」とは、それぞれの職業というフィールドで奮闘している一人ひとりの息遣いを引き出し、共鳴させていく「場」のことを指すのであり、そうした場を作るところが当ワークショップのねらいでもあるのだと感じました。このような場にどっぷりつかって、「自分語」を大いに語らせていただきました。この場をお借りして、ファイザーヘルスリサーチ振興財団に厚く御礼申し上げます。



第16期(平成18年度)事業報告 並びに財務諸表及び収支計算書を承認

第31回理事会・評議員会を開催

東京都渋谷区代々木のファイザー株式会社本社会議室で、平成19年5月15日(火)に開催された第31回評議員会、並びに5月23日(水)に開催された第31回理事会において、第16期(平成18年度)事業報告及び財務諸表・収支計算書が承認されました。

第16期(平成18年度)事業報告

平成18年度に実施した主な事業の概要は次の通りです。

1. 第15回研究等助成事業 (()内は平成17年度実績)

	応募件数	採択件数	助成金額(千円)
国際総合共同研究	- (11)	- (1)	- (10,000)
国際共同研究	64 (84)	5 (18)	21,000 (89,800)
研究者海外派遣	- (58)	- (10)	- (17,700)
研究者短期国内招聘	- (5)	- (2)	- (2,000)
研究者中期国内招聘	- (0)	- (0)	- (0)
若手研究者海外留学	- (17)	- (8)	- (30,100)
若手研究者国内共同研究	66 (81)	13 (17)	23,790 (30,400)
合計	130 (256)	18 (56)	44,790(180,000)

2. 第13回ヘルスリサーチフォーラムの開催

平成18年12月2日(土)千代田放送会館にて、「患者の視点に立ったヘルスリサーチ」のテーマにより、約170名の参加者による研究成果発表を行った。

1会場形式による開催だったが、初めての試みとしてポスター形式によるランチョンセッションを実施した。

これにより平成15・16・17年度研究助成成果35題、一般演題3題が発表された。

同時に、第15回(平成18年度)研究助成金の贈呈式が行われた。

尚、内容を小冊子にまとめて配付した。

3. 第3回ヘルスリサーチワークショップ

平成19年1月27日(土)・28日(日)、アポロラーニングセンター(ファイザー(株)研修施設:東京都大田区)で「End of Life 現代人の生の行方を考える」の基本テーマで、招待、推薦及び公募によるメンバー42名とファシリテーター(幹事・世話人)8名、その他が参加して開催された。川越厚氏(ホームケアクリニック川越 院長)からの「独居末期癌患者の在宅死を考える」の演題による基調講演、長谷川剛氏、中島和江氏(各々本ワークショップ世話人、幹事)からの追加発言に引き続いて、今井博久氏(本ワークショップ幹事)を座長とするパネルディスカッションが行われた。その後、ライオン(Lion)チーム、トキ(Ibis)チーム、キツネ(Fox)チーム、ゾウ(Elephant)チームの4チームに分かれた分科会方式により、基本テーマに沿った活発な討議が2日間実施され、最後に各チームによる発表と全体討議が行われた。

又、1日目分科会終了後には情報交換会が催されて、本ワークショップのもう一つの目的である「出会い」と親交が演出された。

4. 財団機関誌「ヘルスリサーチニュース」の発行

1回10,000部作成、従年の4回発行を平成18年度から年2回(4月・10月号)発行に変更し、10月号から従前の誌面構成内容を一新した。助成プログラムの若手海外留学助成採択者による「留学体験記」、過去の国際共同研究採択者等の近況を尋ねる“温故知新シリーズ「財団助成研究...その後」”を開始し、読者の一層役に立つ内容としている。

5. 寄付活動

平成17年7月から寄付キャンペーンを開始したが、2年目に当たる平成18年度は16件、3,025,207円が集まった。過去財団との関係が無かった方からの寄付もあり、寄付者の間口が広がっている。

6. 管理業務

平成18年11月30日付で佐藤 忠夫氏は事務局長を退任し、同12月1日付で廣田 孝一氏が事務局長に就任した。尚、佐藤忠夫氏は理事として当面常勤で事務局長業務を補佐する。

第16期財務諸表及び収支計算書

第16期は公益法人の新会計基準を導入した初めての決算であり、新会計基準の、 普遍性・透明性の確保、 効率性に関する情報開示、 法人の受託責任の明確化、 外部報告目的の財務諸表の明確化、 という基本的な考え方に準拠した内容となっている。

貸借対照表では昨年度まで一括表示されていた正味財産を指定正味財産と一般正味財産に区分した。期末指定正味財産は19億円、一般正味財産は2億4,152万円あり、合計21億4,152万円の正味財産を保有している。

第16期は財団独自の資金を基に事業活動を行い、8,596万円の基本財産の運用益を主体として経常収益は9,202万円、事業費7,412万円、管理費788万円の合計8,200万円を差引後の当期経常増減額は1,002万円の増となり、最終的に1,003万円の正味資産増となった。

尚、財団の財務諸表につき、監事から、わが国において一般に公正妥当と認められる公益法人会計の基準に準拠して、財団の財政状態並びに第16期の正味財産増減の状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認めるとの監査意見をj得ている。又、収支計算書についても、第16期の収支の状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認めるとの監査意見をj得ている。

貸借対照表

平成19年3月31日現在

正味財産増減計算書

平成18年4月1日から平成19年3月31日まで

科目	金額 (単位:円)	
資産の部		
1 流動資産		
現金預金	2,684,690	
有価証券	21,189,230	
流動資産合計		23,873,920
2 固定資産		
(1)基本財産		
基本財産有価証券	1,976,500,302	
基本財産定期預金	11,614,207	
基本財産合計	1,988,114,509	
(2)特定資産		
研究助成事業強化積立基金	95,743,467	
財団運営強化積立基金	33,790,315	
特定資産合計	129,533,782	
固定資産合計		2,117,648,291
資産合計		2,141,522,211
負債の部		
流動負債合計		0
負債合計		0
正味財産の部		
1 指定正味財産		
指定正味財産合計	1,900,000,000	
(うち基本財産への充当額)	(1,900,000,000)	
2 一般正味財産		
(うち基本財産への充当額)	241,522,211	
(うち特定資産への充当額)	(88,114,509)	
(うち特定資産への充当額)	(129,533,782)	
正味財産合計		2,141,522,211
負債及び正味財産合計		2,141,522,211

科目	金額 (単位:円)	
一般正味財産増減の部		
1 経常増減の部		
(1)経常収益		
基本財産運用益		85,960,351
特定資産運用益		75,470
受取寄付金		3,025,207
雑収益		2,957,825
経常収益計		92,018,853
(2)経常費用		
事業費		
国際共同研究事業費	21,000,000	
研究者育成事業費	29,090,000	
ヘルスリサーチワークショップ費	8,086,039	
財団機関誌費	3,730,927	
ヘルスリサーチフォーラム費	12,209,551	
事業費計		74,116,517
管理費		
旅費交通費	1,117,142	
通信運搬費	1,025,915	
会議費	395,668	
消耗什器備品費	1,871,310	
消耗品費	836,414	
印刷製本費	929,558	
審査謝金	388,886	
租税公課	70,000	
広告費	27,600	
アルバイト費	406,276	
雑費	810,520	
管理費用計		7,879,289
経常費用計		81,995,806
当期経常増減額		10,023,047
2 経常外増減の部		
(1)経常外収益計		6,040
(2)経常外費用計		0
当期経常外増減額		6,040
当期一般正味財産増減額		10,029,087
一般正味財産期首残高		231,493,124
一般正味財産期末残高		241,522,211
指定正味財産増減の部		
指定基本財産運用益		82,494,401
一般正味財産への振替額		82,494,401
当期指定正味財産増減額		0
指定正味財産期首残高		1,900,000,000
指定正味財産期末残高		1,900,000,000
正味財産期末残高		2,141,522,211

第14回ヘルスリサーチフォーラム 及び 平成19年度研究助成金贈呈式

フォーラム (ホール発表)

メイン会場

9:30	開会挨拶	財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団 理事長 岩崎 博充 財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構 専務理事 岡部 陽二
9:45	研究発表 テーマ：治療法のあり方	座長 国立国際医療センター 名誉院長 小堀 誠一郎
	緑内障ガイドライン第2版作成	新潟大学大学院医歯学総合研究科 視覚病態学分野眼科学講座 教授 阿部 春樹
	効果的かつ効率的な禁煙治療の普及方策に関する国際比較研究	(財)大阪府保健医療財団大阪府立健康科学センター 健康生活推進部 部長 中村 正和 代理発表： 同上 副主査 増居志津子
	神経難病患者のQOL向上を目指す非薬物的介入の開発と効果の検証に関する研究	東北大学大学院医学系研究科 肢体不自由学分野 教授 出江 紳一
	科学的根拠に基づく精神科薬物治療のあり方に関する国際共同研究：統合失調症治療における多剤併用大量療法の問題の解決に向けて	横浜市立大学大学院医学研究科 精神医学部門 教授 平安 良雄
10:50	休 憩 (15分間)	
11:05	研究発表 テーマ：医療と教育	座長 慶應義塾大学 名誉教授 矢作 恒雄
	国際生活機能分類(ICF)普及および実用化を目的とした教育研修法の日米共同研究	国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科 教授 学科長 高橋 泰
	医療・医学教育シミュレータの開発・評価・普及に関する研究	京都大学大学院医学研究科 医療経済学分野 教授 今中 雄一
	呼吸器・循環器疾患に対する理学療法士教育の国際比較研究	神戸学院大学総合リハビリテーション学部 准教授 松尾 善美
	大阪府下の中小規模病院における組織活性化と経済効果	意思決定プロセスにおける看護管理と経営管理の協働についての実証研究 大阪府立大学経済学部経営学科 准教授 北居 明
12:10		

フォーラム (ランチョンセッション)

小会場 A~D

12:15	昼食 / ランチョンセッション (ポスター使用)	
小会場 A	研究発表 テーマ：医療とコミュニティ	座長 医療法人財団河北総合病院 理事長 河北 博文
	地方分権下の保健福祉サービス提供体制と専門職の役割に関する日仏比較研究	保健師とアシスタントソーシャルに焦点をあてて 山形県立保健医療大学保健医療学部看護学科 教授 菅原 京子
	市町村障害者計画の実行における住民ニーズの調整と反映の手法開発：公私協働モデルの構築に向けたアクションリサーチ	大阪府立大学人間社会学部社会福祉学科 講師 田垣 正晋
	高齢者虐待予防と早期発見を推進する地域ケアシステムに関する国際的研究	東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究所 地域保健看護学 教授 佐々木明子
小会場 B	地理情報システム技術を用いた高齢者支援施設の地理的アクセスの評価	早稲田大学人間科学学術院 人間科学部健康福祉科学科 福祉情報研究室 専任講師 扇原 淳
	研究発表 テーマ：医療とネットワーク	座長 大阪大学大学院人間科学研究科 教授 中村 安秀
	抑うつ傾向のあるインターネット利用者のピアサポートを目的としたソーシャル・ネットワーキング・サービス：利用者間コミュニケーションの検討	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻 健康管理学講座 健康情報学分野 博士課程 高橋 由光
	介護予防を目的とした「連携バス」の開発	聖マリアンナ医科大学予防医学教室 講師 須賀 万智
小会場 C	情報ネットワークと医薬連携：病院医師と保険薬局薬剤師のコミュニケーションと情報共有が服薬指導と薬剤師の知識習得に与える影響	慶應義塾大学総合政策学部 専任講師 秋山 美紀
	英国における遺伝カウンセリングのあり方と臨床遺伝教育について	東海大学付属病院専門診療学系 産婦人科 助教 近藤 朱音
	研究発表 テーマ：費用効果分析	座長 千葉県立東金病院 院長 平井 愛山
	骨髄非破壊的前処置を用いた非血縁者間臍帯血移植(臍帯血ミ移植)の医療経済解析	東京大学医科学研究所附属病院血液腫瘍内科 助教 湯地晃一郎
小会場 D	我が国における脳卒中や大腿骨頸部骨折などを対象とした回復期リハビリテーション医療に関する費用効果分析	新潟医療福祉大学医療技術学部作業療法学科 准教授 能登 真一
	マネージケアデータベースを用いた薬剤経済評価：慢性閉塞性肺疾患(COPD)における吸入ステロイド薬の早期治療効果(平成15年度 若手研究者海外留学助成による研究)	ノースカロライナ大学公衆衛生大学院医療政策管理学 研究員 赤沢 学
	糖尿病コントロールと医療費との関連	健診レセプト突合データを用いた検討 北里大学医学部衛生学公衆衛生学教室 准教授 佐藤 敏彦
	研究発表 テーマ：看護と介護	座長 国立保健医療科学院公衆衛生看護部 部長 平野かよ子
小会場 D	認知症高齢者の学習療法評価尺度の開発	特定医療法人祐愛会 ゆうあいクリニック 院長 鐘ヶ江寿美子
	行動障害を呈する認知症高齢者の介護者に対して、介護者自身が応用行動分析により行動を分析し対処行動を変化させることができるよう指導する方法の開発に関する臨床的研究	京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学 学内講師 成本 迅
	アルツハイマー病に対するアビリティフォーカスアプローチの検討	看護的視点から NPO法人なすなコミュニティ看護研究・研修企画開発室 室長 堀内 園子
	がん告知後の患者に対する医療サービスの質の向上を目指した支援プログラムの開発および無作為割付試験によるその有効性の検討	千葉大学看護学部訪問看護学教育研究分野 准教授 福井小紀子
13:35		

開催趣旨

近年の我が国は、本格的な少子高齢化社会が進行し、近未来的に人口減少社会の到来など社会構造・経済構造の変化が問題視されています。また、医療格差、医療崩壊という言葉が連日メディアを賑わしており、そのような時代の背景を踏まえて、厚生行政の重要な施策として、保健・医療・福祉全般にわたる改革が進められています。

私たちの健やかで豊かな暮らしに欠くことの出来ない保健・医療・福祉を新しい時代の要請に応えるサービス体制に変革していくことは、私たち一人ひとりにかかわってくる重要な問題です。当財団は従来の「医」の分野にとどまらず、医学の成果を効果的且つ効率的に医療の受け手に適用することを研究する学際的で問題解決型の研究学問である「ヘルスリサーチ」の分野に長年にわたり支援を行ってきました。お蔭様で財団の事業活動が年々評価されるようになりました。

年一回開催される本フォーラムは、当初、助成を受けられた先生方による研究成果発表の場として始まったのですが、近時はヘルスリサーチの研究を志す研究者に広く発表の場を提供することを目的に一般演題の公募採用を行い、他の学会では得られないユニークな研究交流の場として定着して参りました。

さて、本年度のフォーラムでは平成16,17年度国際共同研究成果発表17題、平成17年度国内共同研究発表15題、並びに17年度日本人研究者海外派遣研究発表1題に平成19年度一般演題発表3題を加え、合計36演題を9のセッションに分けて企画しました。昨年から実施し好評を博しました、小会場で昼食を取りながらポスターによる発表を聞くというランチセッションも、昨年に引き続き4会場で開催されます。今年度もより濃密なディスカッションが期待できます。またフォーラムの合間にはメイン会場において本年度研究助成金の贈呈式を行い、当該領域研究者の一層の研究意欲高揚を図っております。

今年の基本テーマは、新たなヘルスリサーチの研究展開を目指して「新しいヘルスリサーチを拓く」に設定致しました。

本フォーラムは昨年に引き続き主務官庁である厚生労働省の後援を頂いての開催であります。また、例年通り財団法人 医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構のご賛同を得ましての開催でございます。奮ってご参加下さいませようご案内申し上げます。

プログラム内容決定

第16回(平成19年度)研究助成金贈呈式

メイン会場

13:40	来賓挨拶	厚生労働省大臣官房厚生科学課長 矢島 鉄也 ファイザー株式会社 代表取締役社長 岩崎 博充
	第16回(平成19年度)助成案件選考経過・結果発表	選考委員長 国際医療福祉大学大学院長 関原 成允
14:20	研究助成金贈呈式	財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団 理事長 岩崎 博充

フォーラム(ホール発表)

メイン会場

14:20	研究発表 テーマ：医療の質	座長 東京大学大学院医学系研究科内科学専攻循環器内科 教授 永井 良三
	国際比較可能な医療の質指標の開発に関する日韓共同研究	国立保健医療科学院経営科学部 経営管理室長 岡本 悦司
	手術の技術評価の精緻化と国際比較：全国病院調査により手術技術評価のための基本データを集積する。そのデータを利用することで、外保連試案の技術評価の精緻化をはかる。また、米国に於ける利用可能なデータと比較する。	財団法人癌研究会有明病院 消化器外科部長 消化器センター長 院長補佐 山口 俊晴
	高品質医療の提供と高収益医療を両立させる経営品質管理システムの研究	医療品質とコストのTrade-OffからWin-Win関係へ 大阪大学医学部附属病院中央クリティカルマネジメント部 病院教授 中島 和江
	日米における皮膚基底細胞癌治療の比較検討	北海道大学大学院医学研究科 皮膚科学分野 助教 青柳 哲
15:25	休 憩(15分間)	
15:40	研究発表 テーマ：臨床研究	座長 日本病院薬剤師会 会長 / 日本薬剤師会 副会長 伊賀 立二
	卵巣明細胞癌に対する国際共同ランダム化第 相臨床比較試験におけるインターネットを用いた24時間登録・ランダム割付システムの開発	埼玉医科大学国際医療センター 婦人科腫瘍科 教授 藤原 恵一 代理発表：北里研究所 臨床薬理研究所 臨床試験コーディネーター部門 室長 青谷恵利子
	日韓両国における臨床試験制度の検証	九州大学病院呼吸器科 講師 高山 浩一
	更年期女性における保健医療行動の相違の日米比較研究	女性コホート研究結果の統合比較による保健医療評価 群馬大学医学部保健学科 医療基礎学講座 教授 林 邦彦
	感染症サーベイランスで探知した保育施設での風疹集団感染と先天性風疹症候群対策	国立保健医療科学院 疫学部 研究員 八幡裕一郎
16:45	研究発表 テーマ：薬事行政	座長 東海大学法科大学院 教授 宇都木 伸
	先端医薬開発での認可制度の比較調査研究	京都大学大学院医学研究科 薬剤疫学分野 教授 川上 浩司
	医薬品用途発明における特許保護のあるべき姿	北海道大学大学院法学研究科 准教授 吉田 広志
	希少疾病用医薬品の市場創出に関する考察	東京大学先端科学技術研究センター 知的財産分野 助教 西村由希子
	薬価決定のあり方に関する国際比較研究	名城大学薬学部 臨床経済学研究室 教授 坂巻 弘之
17:50	終了	
18:00	情報交換会	

印は平成16年度の国際共同研究助成による研究 / 印は平成17年度の国際共同研究助成による研究 / 印は平成17年度の国内共同研究助成による研究 / 印は平成16年度の国際総合研究助成による研究 / 印は平成17年度の日本人研究者海外派遣助成による研究 / 無印は平成19年度一般公募演題

本年度のフォーラムは、国際共同研究、国内共同研究、日本人研究者海外派遣研究の各発表に一般演題発表を加えて合計36演題を、9のセッションに分けて開催いたします。昨年同様ランチセッションとして小ホールでのポスター使用による発表を4セッション企画し、より濃密なディスカッションを可能にしております。奮ってご参加下さいませようご案内申し上げます。

詳しいプログラム内容は、本誌P18、19をご覧ください。

日時 平成19年11月10日(土) 午前9時30分～午後5時50分
 会場 千代田放送会館 〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町1-1 電話:03-3238-7401
 主催 財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団
 後援 厚生労働省(予定) / 協賛 財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構

ご寄付をお寄せ下さい

当財団の活動は、基本財産の運用に加えて皆様からのご寄付により行われています。当財団は、ご寄付をいただいた方々が、税務上の特典を受けられる特定公益増進法人の認定を受けております。

特定公益増進法人とは、公益法人のうち、教育又は科学の振興、文化の向上、社会福祉への貢献、その他公益の増進に著しく寄与すると認定されたもので、これに対する個人又は法人の寄付は以下の税法上の優遇措置が与えられます。(詳細は財団事務局までお問い合わせ下さい)

個人の場合

1年間の寄付金の合計額(その年の所得の30%相当が限度額)から、1万円を引いた金額が所得税の寄付控除の対象となります。

法人の場合

寄付金は、通常一般の寄付金の損金算入限度額と同額まで別枠で損金算入できます。

手数料のかからない郵便局振込用紙を同封しております。

財団の事業の趣旨にご理解下さるようお願いいたしますとともに、皆様からのご寄付をお待ちしております。

ご不明な点は何なりと財団事務局までお問い合わせ下さい。 TEL:03-5309-6712

ご寄付御礼

本年3月以降8月末までに以下の方々からご寄付をいただきました。謹んで御礼申し上げます。

江見 康一様	兼田 康宏様	小林 明子様	廣田 孝一様	梶田 修様	山口企世史様
三浦 孝様	河野 總子様	山田 大輔様	奥澤 徹様	船越真紀子様	松森 浩士様
浅田みどり様	社団法人企業研究会様		株式会社ジェイ・ピーアル様		日本CA株式会社様
フォーカスト・コミュニケーションズ株式会社様			ファイザー株式会社様		(順不同)

猛暑にうんざりしていたこの8月、NHK衛星放送で「若大将シリーズ」が連日放映された。暑さも忘れるほど爽やかな若大将が画面に居た。NHKでは、この映画を含めコンサートなど、今年、古希を迎えた加山雄三さんの特集を行っていたようだ。古希は70歳のことであり、古来70歳まで生きるのは希であったことから長寿の祝いとされている。しかし、加山さんも番組で話していたが、70歳まで生きるのが希であるとは、現代の日本に生きる我々は誰一人そうは思わない。30年に亘り製薬会社の一員として医療の端くれであることに誇りを感じている私は、これも我が国の医療および医療制度のおかげであろうと思った。

奇しくも、「シッコ(SCIKO)」という映画が8月末から日本で上映された。マイケル・ムーア監督のドキュメンタリーであるが、国民皆保険制度のない米国の医療現場の惨状を暴き出している。いまや米国では事故、犯罪、テロ、戦争ではなく、治療費を払えないという理由で命を落とす人数の方が圧倒的だという。米国ではこの映画が上映されてから、公的医療制度の導入が次期大統領選挙のISSUEになったという話もある。

医療崩壊という言葉が連日メディアを賑わしている現在の日本。弱者や貧困層に冷たい国にはなってほしくないし、医師、看護師が患者から尊敬されない国にもなってほしくない。誰もが安心して長生きができる国になってほしい。

来年1月には第4回ヘルスリサーチワークショップが開催される。テーマは「新しい医療のデザイン」である。これからの医療に対する期待と役割について活発な議論が行われることを期待したい。